『人文学報』第117号（2021年５月）
（京都大学人文科学研究所）

関西日仏学館と女性たち

―― 九条山時代（1927-36）における女子部の活動を中心に ――

藤　野　志　織*

は　じ　め　に

1921 年から 27 年まで駐日フランス大使を務めた詩人ポール・クローデル（Paul Claudel, 1868-1955）は，京都という街に一際愛着を抱いていたようだ。東京の日仏会館に続く文化施設を京都に建設する必要性をフランス外務省へ訴える 1926 年の手紙のなかで，彼は次のように語っている。

> 東京に日仏会館が開設されて以来，私は京都にこれと同等の施設をつくることに専念しつづけてまいりました。といいますのも，ご存じのように日本の大きな島，本州は，北と南，関東と関西に分かれており，たがいに対抗意識，競争心をもって張りあっているからです。北すなわち関東は，政治の中心地たる東京と，絹の貿易で栄えている大きな港湾都市，横浜です。南の関西，それは歴史の都，京都であり，古い日本，大和であり，工業の中心大阪であり，さらに大規模な輸入港，神戸です。純粋に客観的な立場に身をおくことができれば，京都には知的伝統があり，芸術や文学や歴史の宝庫が保存されているのですから，私たちが望む文化程度の高い施設をつくる場所としては，東京よりも京都がふさわしいことは間違いありません[1)]。

こうしたクローデルの熱意が実を結び，1927 年 10 月に京都山科の九条山に開館したのが，関西日仏学館（2012 年にアンスティチュ・フランセ関西と改称。以下「学館」）である【写真 1】。もちろん，これはクローデルの独力で成し遂げられたものではない。実業家と政治家の顔を持つフランス帰りの稲畑勝太郎（1862-1949）はじめ，1926 年 2 月に日仏会館に研究員として着任し

* ふじの　しおり　京都大学人文科学研究所助教

写真１　九条山に建設された関西日仏学館（宮本家所蔵）

写真２　京都で調査を行うリュエランとリュエラン夫人
（リュエラン家所蔵）

た地理学者フランシス・リュエラン（Francis Ruellan, 1894-1975）【写真 2】や，彼の書記兼通訳を務めていた宮本正清（1898-1982）など優秀な人材の尽力，多くの賛同者の協力あってのことである[2)]。日本初のフランス公認のフランス語教育・文化機関として誕生し[3)]，第二次世界大戦という未曾有の災禍をくぐり抜けた学館のドラマは人々の興味をそそると同時に，学術的見地から見ても，歴史，外交史，教育史，文化交流史など複数の領域にまたがり，重要な参照項となる可能性を有している。

こうした学館の重要性にいち早く気付き，その歴史を後世に伝えようとする仕事がある。京都における日仏交流史の研究に先鞭をつけたのは，宮本エイ子の『京都ふらんす事始め』

(1986) である。学館設立以前の京都におけるフランス受容の経緯を精緻に調べあげ，学館で教えた講師陣，学館へ通った学生たちの姿を生き生きと描き出した本書は，今後も京都における日仏交流を知るうえで必読の書であり続けるだろう。そして近年，関西日仏学館の歴史を日仏外交史，とりわけクローデルとの関係から捉え直し，精力的に研究を進めているのが，1986年から８年にわたり同館の館長を務め，その後も長年，立命館大学にて教育・研究に携わってきたミッシェル・ワッセルマンである。講演やインタビューなど幅広い場で，彼は学館の創設や移転問題，吉田における独仏の対立，戦時中の活動などについて貴重な証言を交えて語り，日仏交流における学館の重要性を世に問いかけている[4)]。

このように，これまでさまざまな場で取り上げられる機会があった学館の歴史であるが，本稿は学館創立当初から設置されていた女子部の存在に着目したい。とりわけ学館が吉田で再出発をきる以前の九条山時代（1927-36）に焦点を絞り，それが当時の女性の教育機会拡張を背景とした，学館の重要な戦略の一つであったことを明らかにする。私たちはこれから１枚の写真をよすがとして女子部の航跡を辿ってみることにしよう【写真３】。彼女たちは何を思い学館へ通い，何を学んでいたのだろうか。

これは九条山の学館の前で，初代館長（当時の呼称は「主事」）に就任したリュエランを囲んだ集合写真である。まず目を引くのは，艶やかに着飾った華やかな女性たちの姿である。そし

写真３　学館前の集合写真（リュエラン家所蔵）

て最前列中央の髭をたくわえた男性がリュエランであり，同列のもう一人の男性はフランス語の教授であろうか。その隣の白い洋服を着た女性がリュエラン夫人，二列目に書記と教授を兼任し，学館を支え続けた宮本の姿もある（右から3人目）。試みに数えてみれば，男性が37名，女性が16名おり，学館のスタッフを除けば，学生のうちおよそ半数近くを女性が占めていることになる。女性が学ぶことが当たり前ではなかった当時の社会情勢に鑑みれば，この写真はいっそう新鮮に映るだろう。少し硬い表情をしながらも，まっすぐにこちらを見つめ返す彼女たちこそ，私たちがこれから繙いてゆく女子部で学んだ女性たちなのである。

1　関西日仏学館，女子部をつくる

学館はフランス語教育と日仏文化交流の拠点であると同時に，高等教育機関として構想された施設である[5)]。佐々木啓子によれば，戦前の日本における高等教育機関とは，大学，高等学校，高等師範学校および，専門学校を指していた。そのうち，女性に制度上入学が認められていたのは，女子高等師範学校と女子専門学校であったという[6)]。

関西日仏学館が産声をあげた1927年において，女性が教育を受けることはまだ一般的ではなかったが，こうした事情は日本に限ったことではなかった。フランスの第三共和政期（1870-1940）における女子高等教育に光を当てた上垣豊の研究によれば，20世紀初頭のフランスにおいて，高等教育を受ける女性は稀であり，本国の女子学生よりも，外国籍の女子学生の方が多かったという[7)]。また日本では女子専門学校が数多くつくられ，成功を収めたのに対して，上垣によればフランスでは女性のみに開かれた高等教育は発達せず，男子学生を対象とした学部に女性が入学するかたちを取ったという[8)]。リュエランの伴侶は大学教育を受けた女性であったが，彼女がフランスで身を置いていたのがこのような環境であったことは頭の片隅に留めておいてもよいかもしれない。上垣が示した次の資料からわかるように，第三共和政に入り，原則的に大学の門戸が女性に開かれて以降，1930年代に入るまで女子学生の数は顕著な伸びを見せている【資料1】。

資料1　フランスにおける男女別学生数の変化（出典：上垣，174頁）

このように大学で学ぶ女性の数が増加の一途を辿っていたとはいえ，全体としてみれば，まだまだ女学生が珍しかった時代に，リュエラン夫人は女性たちの憧れの的であったに違いない。クローデルもまた，彼女を高く買っていたようだ。彼は初代館長にリュエランを推薦する際に，夫人の存在に言及しているのだ。

> 京都の日仏学館（関西日仏学館）には館長が必要です。その適任者はリュエラン以外にありえません。アイデアを提供したのは彼ですし，この企画の推進者だったのですから。したがってその責任をとらなければなりません。これはそもそも出資者たちの希望でもあります。彼には若さゆえの欠点もありますが，優れた点もあります。情熱と信念をもち，知的で，大学教育を受けた夫人が彼を補佐しています。時々はへまもします。しかし彼はいさぎよくそれを認めます。彼はまた日本人に囲まれていますから，彼が致命的な失態を演じないよう彼らが配慮してくれるでしょう[9]。

ここでクローデルはリュエランを手放しに褒めているわけではないが，若さゆえの欠点や時々犯す間違いさえも，夫人や日本人たちと堅固な協力関係を構築する強みとして評価している。ここには，リュエランが館長になれば，日本とフランスが協力して学館を盛り上げていけるだろうという大きな期待が読み取れる。実際に，女子部の誕生も日本サイドとの話し合いの末に実現している点は興味深い。リュエランは女子部設立の経緯について，フランス外務省宛の手紙のなかで次のように報告している。

> 私は，科学アカデミーの会員であるブラランゲム氏とこの計画について真剣に検討を重ねました。彼も私と同じく，女子部の開設は，日本女性が中心となるさまざまな場に影響を与え，長きにわたり英語とドイツ語が主流となっている男子校や大学と違い，フランス語の勢力拡大の余地が残されている女学校の教員を養成する手段であると考えていました。そして，プログラムの練り上げの過程には，我々を支援せんとする稲畑議員夫妻との重要な意見交換があったのです[10]。

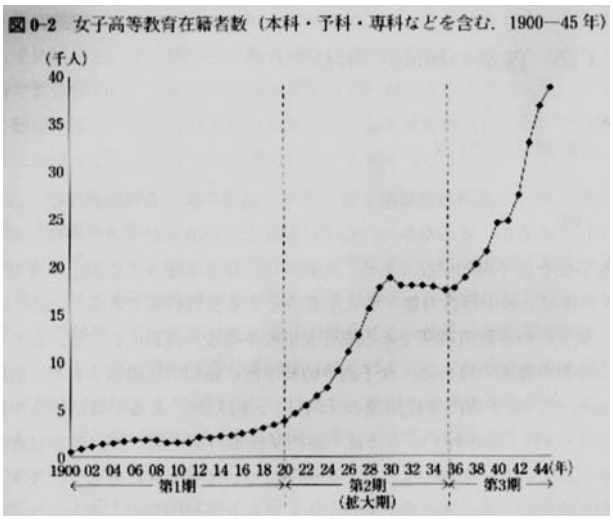
このように，女子部設立の根本には女性を通して自国の勢力拡大を図るフランス側の思惑があった。しかし同時に，稲畑夫妻が構想の段階から積極的に関わっていたことから窺えるように，そこに日本側の強い賛同があったことも見逃せない。関西の女性たちがフランス語やフランス文化に触れる機会をつくりたいという素朴な願いもあっただろうが，おそらく日本人にとって，それ以上に魅力的に映ったのは，女学校教員養成が当時の日本の女性に対する教育機会拡張と社会進出の波に乗るものだったからであろう。というのも女学校教員とは，とりわけ

中産階級以上の女性にとって就職が極めて困難な時代に，比較的容易に社会的な承認が得られる職業だったのである[11]。

ここで当時の状況をよりよく理解するために，戦前期の女子高等教育について詳細に分析した佐々木啓子の研究を参照したい。1900 年から 1945 年までの女子高等教育在籍者数の推移を示した次の表を見てみよう【資料 2】。この表が示しているように，拡大期にあたる第 2 期（1920-35 年）のうち 1920 年から 29 年にかけて，在籍者数は著しく増加している。学館が九条山に建設されたのは，まさにこの拡大の真っ只中 1927 年のことであった。

これは全国的な傾向であるが，佐々木が作成した府県別の地方公立私立女子専門学校の在籍者数の表【資料 3】を見てみると，京都府は大阪府や兵庫県と比べて，1912 年から 28 年にかけて多くの女学生を有していることがわかる。佐々木によれば，女子専門学校とは第二次世界大戦以前において，官立の女子高等師範学校を除いて女子のために設立できるほとんど唯一の教育施設であったという[12]。左端から，京都府，大阪府，兵庫県と並んでいるが，1925 年および 1926 年においては，京都府の在籍者数は他県と比べて文字通り桁違いに多い。1928 年以降，その数は大阪府に抜かれるものの，他県と比べればかなり高い水準を保っている。女子専門学校生と学館の女学生の数を単純に比例させて捉えることはできないとはいえ，当時多くの女子専門学校生を有していた京都は，関西の他府県に比べて女性の学びに対して先進的な雰囲気があったと想像できる。

学館が開校されるまで京都においてフランスに触れる機会がまったくなかった訳ではない。京都で洋学教育の拠点となっていた欧学舎には 1871 年から 1875 年までフランス語学校が設置



資料 2　女子高等教育在籍者数の推移（出典：佐々木，14 頁）

表 3-25　地方公立私立女子専門学校在籍者数（県別）対全国比率

	京都府	大阪府	兵庫県	福岡県	愛知県	広島県	宮城県	長崎県	長野県	地方公私立女専合計	全国女専合計	地方：全国比率(%)
1903 年											778	
1904 年											902	
1905 年											924	
1906 年											937	
1907 年											895	
1908 年											656	
1909 年			21							21	751	2.80
1910 年			19							19	653	2.91
1911 年			11							11	555	1.98
1912 年	28		16							44	795	5.53
1913 年	35		20							55	842	6.53
1914 年	40		19							59	896	6.58
1915 年	44		21							65	925	7.03
1916 年	55		26							81	1032	7.85
1917 年	69		32							101	1215	8.31
1918 年	71		46							117	1414	8.27
1919 年	108		44					20		172	1652	10.41
1920 年	270		117					19		406	2112	19.22
1921 年	354		170					30		554	2820	19.65
1922 年	451	47	167					45		710	3656	19.42
1923 年	613	60	176	108				59		1046	4309	24.27
1924 年	843	417	210	202				78		1750	5405	32.38
1925 年	1009	545	226	283				89		2152	7257	29.65
1926 年	1144	897	213	318			74	110		2756	9026	30.53
1927 年	1394	1267	201	311	61		129	117		3480	10925	31.85
1928 年	1579	1646	209	321	79	271	192	105		4402	13944	31.57
1929 年	1648	1914	227	284	99	302	208	93		4775	16020	29.81
1930 年	1529	2076	201	255	181	290	212	89	73	4906	16853	29.11
1931 年	1370	2217	186	245	190	290	219	85	93	4895	16226	30.17
1932 年	1257	2262	207	147	235	372	253	80	80	4893	16204	30.20
1933 年	1189	2149	267	254	234	381	313	71	81	4939	16173	30.54
1934 年	1110	2049	384	265	221	408	354	63	79	4933	15731	31.36
1935 年	976	1925	476	256	222	372	384	60	89	4760	15549	30.61

出典：『文部省年報』各年度より算出.

資料３　府県別の地方公立私立女子専門学校の在籍者数（出典：佐々木，185 頁）

され[13]，少数ながら女子が学んでいた[14]。そのほか，修道女が開いたフランス手芸塾に通っていた上流階級の婦人[15]，カトリック教会でフランス語を学んでいた女性たちもいたようだ[16]。しかしながらフランス語を体系的に学び，なおかつ講演会やコンサートなどを通じてフランス文化に触れる機会を持てるような施設は存在しなかった。

それでは，学館の女子部は設立当初から大きな反響を呼んだのだろうか。残念ながら，この部門はリュエランらが当て込んだ通りの順調な滑り出しを見せたわけではなかった。リュエラ

写真 4　学館前にてリュエラン夫人を囲んで（リュエラン家所蔵）

ンの報告によれば，開講初年 1927 年度の女学生はたった 2 人，女子聴講生は 3 人のみであった[17]。しかし，学館で学ぶ女性は徐々にその数を増やし，彼が館長を辞する 1930 年末までに，平均して全学生の約 2 割を女学生が占めるまでになる[18]。リュエラン夫人もフランス語講師の不足を補うために教鞭を執ったという[19]【写真 4】。

女子部の学生は普通部の聴講も許されていたためであろうか，年間の授業料は普通部の 36 円に対して，60 円と 1.5 倍近くかかった。そして，この 60 円の登録料は学館の経営を支えるうえで貴重な収入源であったと推察される。というのは，1931 年 4 月より普通部の年間授業料は，官公私立学校在学生に対して 6 割減の 15 円とすることが決定されたためである[20]。学館で学ぶ学生の大半は京都帝国大学および地元の私立大学の学生であり，1931 年度の会計報告には，155 名中，7 割にあたる 109 名に対して減額がなされたと記されている[21]。このように大多数の学生から満額の徴収が期待できない状況で，女子部の存在は学館の運営を経済的に支えていたと言える。

ここで，この年額 60 円がどの程度の価値だったのか，おおよそのイメージを掴むために次のように置き換えてみよう。1929 年の国立大学の授業料は年額 120 円であった[22]。現在の京都大学の授業料年額が 55 万円とすると，その半分なので，当時女子部の学生が納めていた 60 円とは 27 万円くらいだったのではないか。昭和初期の小学校教員の初任給が 45 円から 55 円であり[23]，同時期の公務員の初任給が 75 円であったことを考えると[24]，決して安くはない。

それでは，これほど高額な授業料を払って，彼女たちはいったい何を学んでいたのだろうか。以下では学館のプログラムを参照しながら，女子部の学びについて見ていきたい。

2　女子部における学び

女子部の実態について私たちが参照できる一番古い資料は，2代目館長ジョルジュ・ボノー（Georges Bonneau, 1897-1972）時代の1931年度のプログラム『關西日佛學館一覧』である。1925年に28歳の若さでソルボンヌ大学より文学博士の称号を授与された時，ボノーはフランスで一番年少な文学博士だったという。19世紀のフランスの詩人アルベール・サマンについて博士論文を執筆した俊英が，どのような経緯で日本の詩歌研究に転向したのか定かでないが，彼は日本に招かれ，1926年から29年まで九州帝国大学の教壇に立っていたようだ。その後1930年から32年まで京都帝国大学で教え，日本の詩歌の仏訳にも精力的に取り組んだ[25]。彼はこの期間に，1931年1月から翌年3月末まで学館館長を務める【写真5および6】。

2枚の写真の中央で微笑んでいる人物がボノーであるが，彼のもとで女子部の学生たちは何を学んでいたのだろうか。『關西日佛學館一覧』を繙いてみると，まず授業時間について，月曜日から土曜日まで毎朝9時から10時50分まで女子部の授業に出席すること，そして月曜日から金曜日まで午後に行われる普通部の授業3時間のうち，最初の2時間に出席することが定められている。もちろん本人が希望すれば，3限目の授業にも出席することができた。

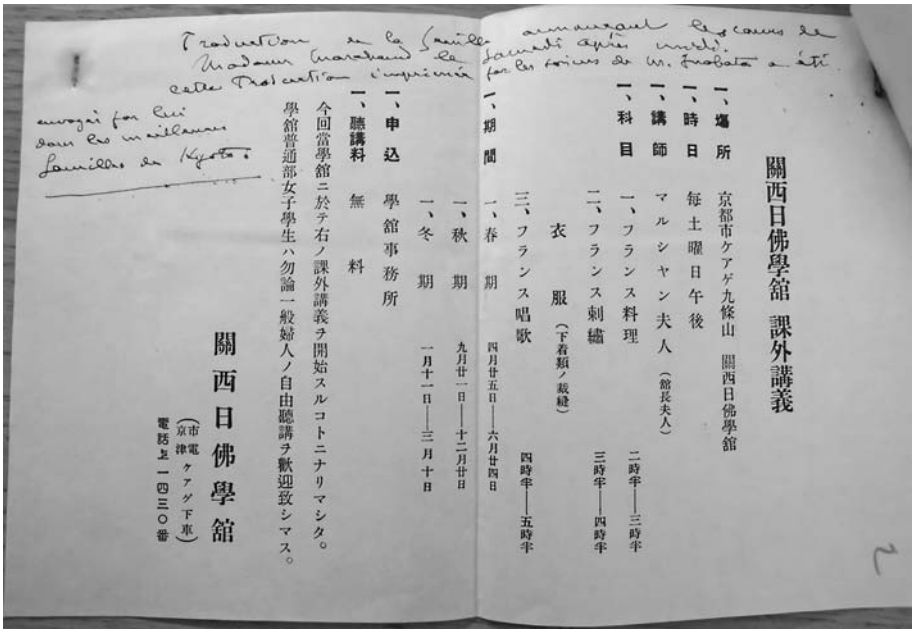
科目は，まず直接教授法による講読がある。フランス語の語彙を学ぶ授業とラ・フォンテーヌの寓話のテクスト読解が1限目（9時から9時50分）に隔日で行われた。発音と平易な作文の演習は月曜日と水曜日の2限目（10時から10時50分）に，文法の授業は金曜日と土曜日の2限目に行われた。また興味を引くのは，「フランス婦人の生活およびその務め」や「著作を通じてみたるフランスの優れたる女性」と題された授業が2限目に週1回ずつ開講されている点

写真5　ボノーを囲んだ集合写真（宮本家所蔵）

写真 6　遠足の様子（宮本家所蔵）

である。前者はフランス人女性を講師として，簡単な会話形式で行われるとあるので，女学生たちは，あいさつの仕方から日常会話までフランス人になったつもりで取り組んでいたのではないだろうか。後者に関しては，17 世紀から現代に至るまでのフランスの閨秀文学の名著から平易な文章を抜粋して解説を行なったと記されている。この年の教科書にはセヴィニエ公爵夫人の書簡選集が用いられ，講義はボノーや宮本正清が担当した[26]。

1931 年度のプログラムを見る限り，女学校教員の養成に関する言及はないが，1932 年 4 月に 3 代目館長にルイ・マルシャン（Louis Marchand, 1875-1948）が着任すると，停滞していた計画が少しずつ動き始めたようだ。新館長夫人は，仏領インドシナでカント高等女学校の校長やサイゴン高等女学校の教諭を歴任した実力派の教育者でもあった[27]。1932 年のプログラムを参照すると，普通部に属する女子部は，初等科と中等科に分かれ，日曜日以外，毎朝 9 時から 11 時まで授業が行われていたことがわかる[28]。初等科はほぼ普通部初等科と同課程である一方，中等科においては，前年度取り上げられたラ・フォンテーヌとセヴィニエ公爵夫人のほかにも，モリエールの『才女気取り』やジョルジュ・サンドの『魔の沼』，コレットの『シド』などが盛り込まれ，より充実した内容となっている。また，語学習得のために蓄音機が使用され，フランス唱歌から，音楽の練習，語法練習，演劇，フランス料理の実習まで行われたという記録からは，女子部に対する並々ならぬ熱意が窺い知れる[29]。そして注目すべきは，学館が自分たちのもとへ通う女学生にだけに目を向け，力を注いでいたわけではないという点である。1932 年よりマルシャン夫人を講師として，学館女学生に限らず，学外の婦人も聴講可能な課外講義が設けられたのである。稲畑勝太郎の援助により実現した聴講無料のこのイベントでは，フランス料理，フランス刺繍，フランス唱歌を学ぶことができた【資料 4】。開講初年度から聴講者の数は 100 名を超えていたというから大変な盛況ぶりである[30]。



關西日佛學館　課外講義

一、場所　京都市ケアゲ九條山　關西日佛學館
一、時日　毎土曜日午後
一、講師　マルシャン夫人（館長夫人）
一、科目
一、フランス料理　二時半——三時半
二、フランス刺繍　三時半——四時半
衣服（下着類ノ裁縫）
三、フランス唱歌　四時半——五時半
一、期間
一、春期　四月廿五日——六月廿四日
一、秋期　九月廿一日——十二月廿日
一、冬期　一月十一日——三月十日
一、申込　學館事務所
一、聽講料　無料

今回當學館ニ於テ右ノ課外講義ヲ開始スルコトニナリマシタ。
學館普通部女子學生ハ勿論一般婦人ノ自由聽講ヲ歡迎致シマス。

關西日佛學館
（市電京津ケアゲ下車）
電話上一四三〇番

資料4　マルシャン夫人による課外講義のお知らせ（フランス外交史料館ラ・クルヌーヴ館所蔵）

そして1933年度になると，女子部は再編され，初等科と高等科に分けられた。マルシャン夫人が担当する高等科では，とりわけ文部省のフランス語教員資格試験受験者のための準備が行われた。1933年度には本科より2名が受験し，ともに合格したと記されている[31]。6年にわたる試行錯誤の末，京都の学館から女性のフランス語教員を送り出すという日本とフランスの大きな夢に，ようやく確かな手応えが得られたのである。この後もマルシャン夫妻はまさに二人三脚で，倦まず弛まず1939年3月まで学館の教育を拡充していくことになる【写真7】。

さて，以上のような女子部のプログラムを見て，いったいどのように感じられただろうか。演劇や音楽を取り入れた授業スタイル，料理や裁縫が学べる無料の講習会と聞いて，筆者などは素直に誘惑を感じてしまう。こうした魅力ある学館づくりは，当時の社会的・外交的な文脈に照らしてみるならば，女性がフランスに触れる機会を増やしたい，女性の社会進出を促したいという日本側の思惑と，そうした風潮に乗ったかたちで，フランスへの憧れを利用し，本国の勢力を拡大しようとするフランス側の思惑の一致によって打ち出された革新的な戦略であった。学館に通った女性たちの生き生きとした様子は，『京都ふらんす事始め』において描き出されている通りであろう。彼女たちの姿をいまに伝える写真を手に取れば，男性と肩を並べ，胸を張り，まっすぐにこちらを見つめ返すその瞳には，困難のなかにあっても自ら道を切り拓くしなやかな強さが見て取れる。関西日仏学館は，90年を超える長い道のりを今日まで女性

写真７　マルシャン夫妻を囲んで（宮本家所蔵）

とともに歩んできた。残された資料から照らし出されたその歴史は，学ぶことの尊さと可能性をいまなお私たちに問い続けているのではないだろうか。

結びに代えて

小論では，ごく簡単にではあるが，学館に置かれた女子部について紹介した。これまで見てきた通り，その活動は日仏両国における女性の教育機会拡張と社会進出の波と軌を一にした先進的な試みであった。そして，女子部がフランス語やフランス文化の享受に甘んじる場ではなく，それらを教える人材の育成を目指す高等教育機関として，女性に学びを開く貴重な場所であった点は繰り返し強調する必要があるだろう。彼女たちの存在が学館を大いに活気づけたことは想像に難くない。

また，リュエランにしろ，マルシャンにしろ，夫人と二人三脚で学館の発展に尽くしてきたことは，同館の運営を考えるうえで非常に重要な点である。というのも，やはり当時にあっては高等教育を修了していようとも学問において女性は周縁的な存在であったためである。実際，学館の館長夫人，女性教員たちが担当していたのも，発音や平易な文章読解，女子部の授業など，主として初級者向けの授業であった。見方を変えれば，彼女たちは絶えず，フランスへの入り口に立っていたわけで，フランス語・フランス文化が広がっていく過程でこうした女性たちが果たした役割の大きさは計り知れない。今日まで彼女たちの名前や来歴が詳しくわかっていないのは非常に残念なことであり，まずこの点を今後の課題としたい。

最後に，本稿のために貴重な写真資料の掲載を快諾してくださった，宮本正清氏の夫人である宮本エイ子氏，そしてフランシス・リュエラン氏のご孫子にあたるドゥニ・リュエラン氏の

ご厚意に深く感謝申し上げるとともに，長きにわたり歴史の証言を守り通してこられたその信念と情熱に心からの敬意を表したい。

註

1） クローデルが外務省に宛てた 1926 年 10 月 14 日付の書簡。フランス外務省資料「日本におけるフランス語，1922-29」（60 巻，分類 583-1，586-1-2，33 号）ポール・クローデル『孤独な帝国　日本の一九二〇年代 —— ポール・クローデルの外交書簡一九二一－二七』奈良道子訳，草思社［草思社文庫］，2018 年，531 頁。下線による強調は引用者。以下同様。

2） 学館設立に関わった人々については次の文献に詳しい。宮本エイ子『京都ふらんす事始め』駿河台出版社，1986 年。

3） 1924 年に設立された東京の日仏会館は，フランス語の教育機関ではなく，日仏の学術交流を促進する研究機関としての役割が大きい。

4） 2016 年 6 月に関西日仏学館竣工 80 周年を記念した講演会で発表された「九条山から吉田へ —— 関西日仏学館「新館」80 周年を記念して」や 2017 年 10 月にアンスティチュ・フランセ関西創立 90 周年を記念したシンポジウムにおける講演「動乱の時代の関西日仏学館（1940-1945）」などがある。2 編のテクストの邦訳は以下の冊子にまとめられている。ミッシェル・ワッセルマン『京にフランスあり！アンスティチュ・フランセ関西（関西日仏学館）の草創期』立木康介訳，京都大学人文科学研究所・アンスティチュ・フランセ関西，2019 年。

5） アンスティチュ・フランセ関西所蔵資料より。1929 年 3 月 1 日付の「財團法人日佛文化協會設立願」とともに提出された「關西日佛學館事業概要」の授業の項には，「本学館ハ一ノ高等教育機関ニシテ，国籍，学歴ノ如何ヲ問ハズ満十七歳以上ノ男女ハ入学スルコトヲ得　入学試験ハ一切之ヲ行ハズ官公私立大学専門学校等ニ在学中ノ学生トイヘドモ本学館ノ学生タルコトヲ得」と記されている。

6） 佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程 —— 政府・生徒・学校のダイナミクス』東京大学出版会，2002 年，13 頁。

7） 上垣豊「ラテン語の障壁を乗り越えて —— 第三共和政期フランスにおける女子高等教育」香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育—機会拡張と社会的相克』昭和堂，2008 年，171-172 頁。

8） 同上書，172 頁。

9） クローデルが外務省に宛てた 1927 年 1 月 10 日付の書簡。フランス外務省資料「日本におけるフランス人，1922-29」（60 巻，分類 583-1，586-1-2，2 号）ポール・クローデル『孤独な帝国日本の一九二〇年代 —— ポール・クローデルの外交書簡一九二一－二七』前掲書，561 頁。

10） Archives du Ministère des Affaires étrangères（MAE）, Lettre de Ruellan à MAE du 9 avril 1932, p. 12.

11） 佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程 —— 政府・生徒・学校のダイナミクス』前掲書，48 頁。

12） 同上書，126 頁。

13） 京都府立総合資料館編『京都府百年の年表　5 教育編』京都府，1970 年，58-68 頁。

14） 京都府教育會『京都府教育史：皇紀二千六百年記念』上巻，京都府教育會，1940 年，340 頁。

15）　宮本ヱイ子『京都ふらんす事始め』前掲書，80 頁。
16）　同上書，140-141 頁。
17）　Ruellan à MAE, *op. cit.*, p. 12.
18）　*Ibid.*, p. 21.
19）　*Ibid.*, p. 15.
20）　宮本家所蔵資料より。『關西日佛學館一覧第五年　昭和六年四月－昭和七年三月』4 頁。
21）　アンスティチュ・フランセ関西所蔵資料より。『會計報告（昭和七年三月卅一日現在)』2 頁。
22）　森永卓郎監修『明治・大正・昭和・平成　物価の文化史事典』展望社，2008 年，276 頁。
23）　昭和 6 年から 8 年にかけての小学校教員の初任給（ただし月俸。諸手当を含まない基本給）［週刊朝日編『値段史年表　明治・大正・昭和』朝日新聞社，1988 年，92 頁］。
24）　大正 15 年から昭和 12 年にかけての公務員の初任給（ただし月俸。諸手当を含まない基本給)。昭和 21 年 3 月まで高等文官試験に合格した高等官を対象とした調査［同上書，67 頁］。
25）　堀口大學「ボノオ博士の日本詩歌の佛譯」『短歌研究』昭和 8 年 3 月号，改造社，1933 年，98-103 頁。
26）『關西日佛學館一覧第五年　昭和六年四月－昭和七年三月』13-14 頁。
27）　フランス外交史料館ラ・クルヌーヴ館所蔵資料より。1932 年度の学館プログラム『關西日佛學舘學則』8 頁。
28）　同上書，2 頁。
29）　同上書，6 頁。
30）　アンスティチュ・フランセ関西所蔵資料より。『報告（昭和七年四月一日－昭和八年三月卅一日)』1 頁。
31）　アンスティチュ・フランセ関西所蔵資料より。『報告（昭和八年四月一日－昭和九年三月卅一日)』7-8 頁。

写真の出典に関して

写真 1 および 5～7 は，宮本ヱイ子氏の所蔵資料である。京都大学人文科学研究所の立木康介教授が主導する「京都における日欧交流史の初期調査」(「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」の一部門）を通して，写真データとして提供していただいたが，本稿の執筆にあたり，改めて掲載の許可を得た。

写真 2～4 は，フランスに暮らすドゥニ・リュエラン氏からアンスティチュ・フランセ関西に写真データとして提供されたことで存在が明らかになった。リュエラン氏に使用許可を得る際には，アンスティチュ・フランセ関西のスタッフである長谷川さと子氏に連絡を取っていただいた。彼女の丁寧なお仕事のおかげで，スムーズに話を進めることができた。ここに記して感謝したい。

要　旨

関西日仏学館は，フランス語教育と日仏文化交流の拠点として 1927 年に京都山科の九条山に誕生した。高等教育機関として構想されたこの施設は，女学校のフランス語教員の養成を掲げ，「女子部」を創設する。当時，男性のための高等教育機関では英語とドイツ語が主流となっており，フランスは女子部を通して，関西における本国の勢力拡大を目論んだのである。言い換えれば，これは文化・外交戦略の一環でもあった。

ただし，同時に日本側が意欲ある女性のために教育機会を開こうと，このアイデアを強く後押ししたことも見逃してはならない重要な点である。本稿では，日仏両国における女性の教育機会拡大と社会進出の機運の高まりという時代背景を視野に収めながら，学館女子部の初期の活動（1927-36）を検討していく。学館のプログラムを繙いてみれば，1932 年度より，女子部の授業内容が一層充実したものとなり，女学校教員の養成が本格化していることがわかる。そして，1933 年度には 2 名の女学生が揃って文部省の女学校フランス語教員試験を突破したと記されているように，そのプログラムは確かな実績を上げていた。また，学館がフランス料理やフランス刺繍などを教える無料の土曜講習会を開くなど，館外の女性にも学ぶ場を提供していた点も興味深い。こうした学館を取り巻く女性の学びは，20 世紀前半という時代に鑑みれば，先進的な試みであったと言えるだろう。これまで踏み込んで論じられることのなかった学館の女子部に光を当てた小論が，今後，関西における女子教育や文化交流を再考する一助となることを強く願っている。

キーワード：関西日仏学館，京都，フランス，女子教育，文化交流

Abstract

In 1927, the Institut franco-japonais du Kansai opened on Mt. Kujo of Kyoto as a centre in charge of teaching French and promoting a cultural exchange between France and Japan. Designed as a higher education institution, it comprised a “women’s division”, which aimed to train women teachers for women’s schools. English and German were at the time mainly used in higher education institutions for men. In other words, France strategically established this division in order to expand its sphere of influence through women’s division in Kansai.

The purpose of this paper is to examine the activities of this “women’s division” during its first years (1927-36), taking into consideration the enhancement of women’s education and women’s participation in society. This division was the result of French political strategies, but it is also important to understand that Japanese strongly backed up the idea of giving an educational opportunity to women with motivation. For example, this institution had woman students take lessons usually reserved to men and opened free Saturday lectures on French cuisine and French embroidery, etc. These were advanced attempts for the early 20th century. Studying the history of the Institute therefore leads to a deeper understanding of the acceptance of French culture in Kansai.

Keywords : Institut franco-japonais du Kansai, Kyoto, France, girls’ and women’s education, cultural exchange